



安全装備品と消防団活動



「クラーク博士「Boys, be ambitious」
(青年よ、大志をいだけ) 石碑」

北海道北広島市消防本部

1 はじめに

北広島市は、明治17年に広島県人25戸103人が集団移住し、一村形成を目指して原始の森に開拓のくわを入れ、まちづくりが始まりました。その後、純農村として8千人程度の人口で推移していましたが、昭和45年から始まりだした北海道営北広島団地の造成と工業団地の開発により人口が急増し、平成8年には市制を施行しました。

当市は、北海道石狩平野のほぼ中央に位置し、北西は道都札幌市、北は江別市、東は千歳川を挟んで長沼町と南幌町に、南は恵庭市に接しています。地形は、南西部は狭く北東部に伸びて次第に広がる形になっており、周囲は約52.5km、面積は118.54km²となっています。南西部の島松山(492.9m)を除いては、標高100m前後の丘陵が各所に起伏しており、西側の丘陵上部と東側の丘陵下部で平坦地を形成しています。また、千歳川流域や各沢地には、低地が存在しています。古くから交通の要衝で、クラーク博士が「Boys, be ambitious」(青年よ、大志をいだけ)の名言を残し、学生たちと別れた地でもあります。JR北海道が中央部を南北に縦断し、国道36号と道央自動車道が西地区を南北に縦断しています。また、国道274号が北西部の西の里地区を東西に横断

し、東地区ではこれと交差する道道江別恵庭線が南北に縦断して北海道の重要な交通動脈になっています。また、この地の利により、市内工業団地には大規模な物流拠点が数多く存在し、近年は札幌市と接している大曲地区に、大型ショッピングモールとアウトレットモールが相次いで開業しました。遠く離れた道東・道南方面の北海道道民に加えて、海外・道外からの観光客も訪れています。

気候は、おおむね内陸性の気候で、北海道の中では比較的温暖です。平成22年の年間降水量は1,174mm、最深積雪は84cm、降雪は10月から3月まででした。平年では年間降水量は1,047mm、最深積雪は83cm、降雪は11月から3月までとなっています。

人口は、60,353人で、平成19年をピークに減少傾向にあり、高齢化も進んでいます。(国勢調査平成22年10月1日現在)

2 消防団の組織概要

北広島市消防団は、大正2年に結成された火防組合と消防組から始まり、昭和22年に広島村消防団が発足、昭和49年に常備消防が開設されるまでの間は、地域の消防活動を全て賄っていました。街の発展とともに徐々に拡大し、平成24年



「出初式 観閲式」



「札幌市南消防団視察（消防団員自主研修事業）
車両機材説明時の状況」



「消防団合同訓練 長距離送水・放水訓練」

3 安全装備品整備等助成を利用するに至った経緯

当消防団は、平成21年度より若手団員10名を選抜し、毎年北海道内の消防団の活動状況を視察しています。当消防団が抱えている問題点をどのように対処しているのかを調査して、フィードバックさせる事業を実施して来ました。

これにより、団員の公務災害抑制に不可欠であ

12月1日現在1団本部4分団120名の条例定数となり、実員120名、団長1名、副団長2名、分団長4名、副分団長4名、部長6名、班長23名、団員80名の組織構成となっております。その中には女性消防団員が12名在団しています。これに消防ポンプ自動車4台、消防ポンプ付き積載車1台、小型動力ポンプ4台を配備しています。

近年全国的に消防団員数が減少している中、当市は、地域住民並びに地元企業のご理解、団幹部の努力により、団員数にあっては条例定数のほぼ上限で推移しておりますが、年々被用者の割合が増加し約45%を占める状態となり、昼間の火災等の発生時における出動人員確保が十分に出来なくなることを懸念しています。今後は、女性消防団員の拡充、機能別消防団員や学生消防団員の採用を検討し、非常備消防力を維持して行くことを検討しなければならないと考えています。



「防火服」



「作業用雨衣」



「助成を受けた防寒衣」



「安全帽」

る安全装備品が不十分であることを目の当たりにし、計画的な改善に乗り出すことになりました。平成22年度に視察先消防団の取り組みを参考とし、当消防団の現状と今後を見据えた消防団員安全装備品整備事業を策定、この際に消防基金の「消防団員安全装備品整備等助成事業」を活用することにしました。

まずは身近な活動服の整備から始めました。次に安全靴、防寒衣と整備し、保安帽、作業用雨衣と順次整備して行きました。現在は防火服の更新作業中であります。これらの整備事業により消防団活動が活性化し、自発的な活動が増加しました。平成23年度には「S-KYT（消防団危険予知訓練）」に約過半数の団員が参加し、安全意識を高めました。また、外観イメージの向上により、少なからず団員確保に寄与したものと考えています。

4 公務災害を発生させないために

本市の災害について振り返ってみますと、開拓以来、幾度となく水害に見舞われ、特に、昭和56年の大水害では、住宅や道路、河川、農作物に大きな被害を受ける一方で、応急対策にあっていた消防団員1名が亡くなるという痛ましい公務災害が発生しました。以来、重篤な公務災害は起きていませんが、この度の助成を受けて整備した防寒衣を含む安全装備品の着用を徹底して、公務災害につながる危険を未然に摘み取るとともに、今後とも団員が安全に活動できる環境を整えて行くために、引き続き個人装備の充実に努めて行きたいと考えています。

また、団員の事故防止と安全確認の意識を高めるために「消防団員安全管理セミナー」と「S-KYT（消防団危険予知訓練）」などの研修を継続実施して行きたいと考えています。



「S-KYT（消防団危険予知訓練）」



「水防訓練」



「消防ポンプ車操法訓練」